

福祉教育キャンプにおけるキャンプでの生活体験学習が キャンプのイメージに及ぼす影響

植屋 摩紀¹⁾ 杉浦 春雄²⁾ 西牧 正行³⁾ 高瀬友美子⁴⁾
梅山 弘行⁵⁾ 城 正子⁶⁾ 植屋 悦男³⁾ 大貫 稔³⁾

Effects of Welfare Education Camp on the Image of Camping in Urawa University Junior College Students

Maki Ueya¹⁾, Haruo Sugiura²⁾, Masayuki Nishimaki³⁾, Yumiko Takase⁴⁾
Hiroyuki Umeyama⁵⁾, Masako Shiro⁶⁾, Etsuo Ueya³⁾, Minoru Ohnuki³⁾

要約：

本研究では、浦和大学短期大学部学生（117名）を対象とした、福祉教育キャンプにおけるキャンプでの生活体験学習がキャンプのイメージに及ぼす影響について検討した。実習前と比較して、実習後の刺激語（キャンプ）に対する反応語数は有意に増加した。実習前後の一般的な反応語は、テント、山、川およびキャンプファイヤー等であった。反応語の分類では、実習後に感情型、要素型、環境型が減少傾向を示した。一方、社交型（例えば、友達、友情、協力、笑顔など）は実習後有意に増加した。

キーワード：福祉教育キャンプ、組織キャンプ、イメージ、反応語

1. 研究目的

近年、子供たちの多くが多様な悩みを抱えており、その反動として授業崩壊、登校拒否、引きこもり、不可解な凶悪事件などの社会的現象を招いている^[1]。また、青年期においては、社会との積極的な関わりを求める意欲もなく、親しい友人を持つこともなく、孤立している青年が増えている。星野^[2]はこれらの要因として、都市化や少子化、受験体制により遊び場と仲間と自由時間を失った子どもたちは、自然体験はもとより生活体験、社会性や耐性の不足など、多くの直接体験の不足を挙げている^{[1][3][4][5]}。文部科学省は「21世紀を展望した我が国の教育のあり方」^[6]について、これ

からの教育は「ゆとり」の中で「生きる力」を育むことが重要であり「生きる力」を育むためには生活体験、自然体験、社会体験などの体験学習を充実させることが必要であることを指摘している^[7]。今では自然の中での生活体験は、単に教育やレクリエーションのための手段や目的としてだけでなく、人々がこれまでに失ってきた不足体験の補完という役割も含めて、人間の存在そのものにとっても極めて重要な役割をになってきている^{[8][9]}。近年、各大学では学生の行動力の育成や自主性の育成、問題解決能力の向上といったものを図る目的を持って野外教育をカリキュラムに組み込むところが増えてきている^{[10][11]}。しかし、大学生を対象とした野外キャンプの効果について

- | | |
|---------------------|--|
| 1) 愛知医療学院理学療法科 | Department of Physiotherapy, Aichi Medical Treatment Academy |
| 2) 岐阜薬科大学保健体育学教室 | Department of Physical Education, Gifu Pharmaceutical University |
| 3) 浦和大学総合福祉学部 | Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University |
| 4) 名古屋簡易保険総合健診センター | Nagoya Post Office Life Insurance General Medical Examination Center |
| 5) 特別養護老人ホームスマイルハウス | Special Nursing Home for the Aged, Sumairu Hausu |
| 6) 浦和大学短期大学部福祉科 | Department of Comprehensive Welfare, Urawa University Junior College |

の検討はまだ少ない。大学における教育キャンプを効果あるものにするためには、まず、キャンプの教育的目標と活動のプログラムを明確にしておくことが重要となる^[12]。高橋たち^[10]、川村たち^[13]、井筒^[11]はキャンプの実施前後で、キャンプの持つイメージの変化、キャンプにおける自己概念の変化から教育的効果をみている。

本研究では、福祉科専攻の短期大学部生を対象に、自然との触れ合い方、自然を利用した共同生活など様々な生活体験活動を行わせた場合、キャンプに対するイメージ^[14]が、キャンプ実習前後で学生の意識にどのような変化がみられるのか検討し、合わせてキャンプ・プログラム評価の基礎資料を得ることを目的とした。

2. 研究方法

2.1 対象者

本研究では、福祉教育キャンプの実習に参加した浦和大学短期大学部福祉科学生117名（女子学生）を調査対象とした。なお、学生には事前に本研究の目的および主旨を十分に説明し、調査への同意を得た。

2.2 キャンプ実習の概要

(1) 福祉教育キャンプの教育的意義と期待される効果^[15]について、その教育的概要を示すと、野外での集団生活の中では、共同、率先、責任、奉仕などの実践を体験させ、多様な自然体験の学習の中から福祉従事者に必要とされる自己管理能力、他人に対する優しさ、思いやりの心を体得させるような学習計画がなされている。

(2) キャンプ・プログラムの内容は、講義科目がキャンプの基礎知識、テント技術法、自然観察、野外炊飯、キャンプカウンセリング、野外クラフト、ロープワーク、ネイチャーゲーム、キャンプファイヤー技術、グループワークなど、指導計画の立案が用意されており、これに基づいた教育プログラムが展開されている（資料1）。写真でプログラムの一部を紹介した。写真1はキャンプ場に到着後、3泊4日の拠点づくりを参加者全員で行い、この中で7～8人のグループに班分けされたキャンプの生活班が互いに協力し合い、各々の炊事場づくり、宿泊テントの設営を行っている場面である。写真2は、普段学内では交流のない学生同士でグ

ループを形成させ、野外活動の一環としてウォークラリーを体験させている場面である。写真3は、車椅子利用者を対象（障害者（児）や高齢者）として、野外施設での車椅子利用を体験している場面である。写真4は、知的障害者（児）や児童に対する野外クラフト（工作）の制作場面を体験しているところである。



写真1



写真2



写真3



写真4

(3) キャンプの実施期間は平成14年8月3日～6日
(前半組)と8月27日～30日(後半組)の2回にわたって実施され、キャンプ実習は各々3泊4日の日程

で行われた。

(4) キャンプの実施場所は埼玉県青少年総合野外活動センターであった。

資料1 キャンプ実習の計画表

浦和大学短期大学部福祉科キャンプ実習計画表

場所：埼玉県青少年総合野外活動センター

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目
6:00		・起床	・起床	・起床
:30		・朝の集い	・朝の集い	・朝の集い
7:00				
:30		・野外炊飯／朝食	・野外炊飯／朝食	・野外炊飯／朝食
8:00	・集合(短大)	後片付け	後片付け	後片付け
:30	(東川口駅)	自由	自由	
9:00	・出発(バス)			講義・実技
:30		講義・実技	講義・実技	・キャンプの計画、
10:00	講義(資料配布)	・サイクリング	・ウォークラリー	・運営、評価法
:30	・キャンプの特性、歴史	・オリエンテーリング		・指導計画の立案
11:00			・車椅子体験	実施、評価
:30		・サバイバル技術		・試験
12:00	・到着：秩父の施設			
:30	昼食、川辺の体	昼食	昼食	昼食
13:00	験遊び			
:30	・出発(バス)	実技	講義・実技	・退所式
14:00		・体験活動	・テント設営・撤収法	修了証配布
:30	到着：キャンプ場	野外クラフト	・キャンプファイヤー技術	・退所・出発
15:00	入村式	紙、木工		
:30	・コミュニケーション・ワーク		・指導技術法	・研究課題と連絡
16:00				[キャンプ実習のまとめ方]
:30	講義・実技	講義・実技	講義・実技	
17:00	・グループ・ワークA	・グループ・ワークB	・グループ・ワークC	
:30	野外炊飯／夕食	野外炊飯／夕食	野外炊飯／夕食	
18:00				
:30	・自由時間	・自由時間	・自由時間	・到着、解散
19:00				(東川口駅)
:30	講義・実技	講義・実技	実技	(大学)
20:00	・福祉とキャンプ	・野外施設での企画と実践指導法	・キャンプファイヤー	
:30	・星座物語と夜の天体観測			
21:00				
:30	自由時間	自由時間	自由時間	
22:00				
:30	学生就寝	学生就寝	学生就寝	
23:00	★スタッフ会議	★スタッフ会議	★スタッフ会議	
:30				
24:00				

★学生のテント見回りを行う(不調を訴える学生がいなければ教員も就寝)

2.3 調査方法

(1) キャンプについてのイメージ調査は自由連想法^[16]を用いた。刺激語は「キャンプ」で記入時間は1分間^[11]とし、回答方法は用紙記入法(用紙には1～50までの番号を記入した)を用いた。調査を行う際、対象者には「キャンプという語から思いつくかぶ名詞、形容詞を順番に書いて下さい」と指示した。

(2) イメージ調査はキャンプ実習地に到着し、開校式直前(キャンプ実習前:実習1日目)、キャンプ実習中(実習2日目)、3泊4日のプログラムを終了した閉校式終了後(キャンプ実習後:実習4日目)およびキャンプ実習終了2ヶ月後の計4回に渡り実施した。

2.4 統計処理

本研究において平均値の差の検定では、異なる集団の場合には対応しない差の検定を用い、同一対象者の比較の場合には対応する差の検定を用いた。また、比率の比較の場合には適合度の検定を用いた。統計的有意水準はすべて $p < 0.05$ とした。

3. 結果

キャンプの指導において重要なことは、キャンプでの個々の活動の指導だけでなく参加者の実態や参加動機を把握し、これに適応した適切な指導を行うことが大切である^{[17][18]}。こうした意味で、参加者のキャンプに対する意識と認識の度合いを知ることは重要なことである。そこで、キャンプに参加する学生に対し、イメージ調査を行い、キャンプの参加前、参加中、参加後、参加2ヶ月後において、キャンプに対するイメージがどのように変容するのか、以下の項目について検討した。

3.1 キャンプのイメージに対する反応語数の変化

反応語数は、その個人がどれだけキャンプという刺激語に対して反応したかを現す数値である。即ち、反応語数の多さはイメージの豊富さ^[16]とも関連する。ここでは、過去のキャンプ経験の有無が反応語にどのような差を生じているのか、また、キャンプの参加前と参加後で反応語にどのような変化が認められるのか両者の間で比較した。

(1) 対象者のキャンプ経験の有無について

過去におけるキャンプ経験の有無を表1に示した。今回、キャンプに参加した117名の学生の中で、

過去にキャンプの参加経験が有る者は48名(41.3%)で、未経験者は69名(58.7%)であった。図1にキャンプの刺激語に対する平均反応語数を示した。キャンプ実習前、実習中、実習後、実習2ヶ月後のそれぞれにおいて、キャンプ経験の有無による有意差は認められなかった。

表1 キャンプ経験の有・無

キャンプ経験有り(A群)	48名	(41.3%)
キャンプ経験無し(B群)	69名	(58.7%)
合計	117名	(100%)

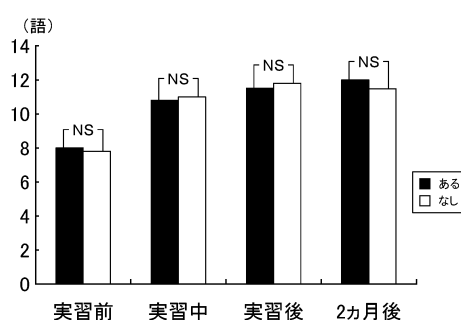


図1 キャンプ経験の有無による反応語の変化

(2) キャンプ実習前後の反応語数の変化

次に、キャンプという刺激語に対する反応語数が直接キャンプに参加し体験することでキャンプの実習前後にどのような変化をするのか、対象者全員を合わせて検討し、図2に示した。全体での反応語数をみると実習前は平均8.0語で、実習中は平均10.4語へと有意な増加を認めた。また、実習後は平均11.7語で、実習2ヶ月後では平均11.6語へと横ばいを示した。即ち、反応語数は実施前と実習中、実施中と実習後、および2ヶ月後において有意な増加を示した。

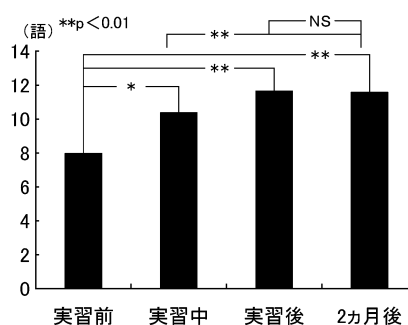


図2 キャンプ実習前後の反応語数の平均値の変化

3.2 キャンプに対する反応語の変化

キャンプ実習前後における反応語の上位30位までを表2に示した。図3は、反応語の順位を縦軸に示し、横軸には反応語の各項目を示した。キャンプ実施前の反応語の多い項目の順に左側から右側に羅列し、キャンプ実習前の項目を基準にして、この項目に合わせるように実習中、実習後、実習2ヶ月後の反応語を上位30位まで並べた。棒グラフは、項目ごとに左側から実習前、実習中、実習後、実習2ヶ月後の順に並べた。キャンプ実習前に多く見られた反応語は「テント(69.5%)」が最も多く、次いで「山(59.3%)」、「川(58.5%)」、「キャンプファイヤー(44.9%)」の順であった。次にキャンプ実習中での反応語は「虫(61.9%)」、「テント(55.9%)」、「山」、「川」、「キャンプファイヤー」となり、実習前に対して大きな変化は見られなかった。また、実習後の反応語には「キャンプファイヤー(70.3%)」、「川(57.6%)」、「虫」、「テント」、「楽しい」などが上位に挙げられ、キャンプ

実習期間中における反応語には「キャンプファイヤー」が最も強く印象深いイメージとして取り挙げられていた。しかし、2ヶ月後には、「楽しい(45.8%)」、「キャンプファイヤー(44.1%)」、「テント(42.4%)」、「自然」、「協力」、「仲間」などの反応語が上位の順位を占めていた。キャンプの実習前に比べ、反応語の順位が実習中、実習後に下がった項目には「テント」、「山」、「川」、「虫」、「カレーライス」、「バーベキュー」、「木」などが挙げられたが、逆に順位が上がった項目には「キャンプファイヤー」、「楽しい」、「自然」、「仲間」、「友達」、「協力」などの反応語が挙げられた。

3.3 全反応語数に対する反応語の分類

具体的な反応語として現れたイメージを、連想検査法^[16]では表3の通り分類している。表3に、全反応語に対する反応語の分類を示した。反応語の分類別から学生達のキャンプに対するイメージの変化を図4に示した。感情型は「きれい」、「汚い」、「楽しい」、「苦しい」などを対象に対する主

表2 キャンプ実習前後における反応語の変化

キャンプ実習前				キャンプ実習中				キャンプ実習後				キャンプ2ヵ月後			
イメージ	分類	個数	%	イメージ	分類	個数	%	イメージ	分類	個数	%	イメージ	分類	個数	%
1 テント	要素型	82	69.5%	1 虫	要素型	73	61.9%	1 キャンプファイヤー	共存型	83	70.3%	1 楽しい	感情型	54	45.8%
2 山	環境型	70	59.3%	2 テント	要素型	66	55.9%	2 川	環境型	68	57.6%	2 キャンプファイヤー	共存型	52	44.1%
3 川	環境型	69	58.5%	3 山	環境型	59	50.0%	3 虫	要素型	62	52.5%	3 テント	要素型	50	42.4%
4 キャンプファイヤー	共存型	53	44.9%	4 川	環境型	55	46.6%	4 テント	要素型	59	50.0%	4 自然	環境型	44	37.3%
5 虫	要素型	53	44.9%	5 キャンプファイヤー	共存型	54	45.8%	5 楽しい	感情型	57	48.3%	5 協力	社交型	43	36.4%
6 楽しい	感情型	52	44.1%	6 楽しい	感情型	51	43.2%	6 自然	環境型	54	45.8%	6 山	環境型	36	30.5%
7 カレーライス	要素型	48	40.7%	7 バーベキュー	共存型	40	33.9%	7 バーベキュー	共存型	54	45.8%	7 仲間	社交型	34	28.8%
8 バーベキュー	共存型	43	36.4%	8 自然	環境型	39	33.1%	8 山	環境型	54	45.8%	8 川	環境型	32	27.1%
9 自然	環境型	41	34.7%	9 カレーライス	要素型	35	29.7%	9 カレーライス	要素型	43	36.4%	9 虫	要素型	30	25.4%
10 木	環境型	37	31.4%	10 木	環境型	27	22.9%	10 協力	社交型	43	36.4%	10 友情	社交型	26	22.0%
11 涼しい	感情型	31	26.3%	11 協力	社交型	22	18.6%	11 友達	社交型	35	29.7%	11 カレー	要素型	24	20.3%
12 暑い	感情型	24	20.3%	12 緑	環境型	21	17.8%	12 仲間	社交型	24	20.3%	12 友達	社交型	23	19.5%
13 緑	環境型	23	19.5%	13 自炊	共存型	18	15.3%	13 木	環境型	24	20.3%	13 バーベキュー	共存型	23	19.5%
14 森	環境型	22	18.6%	14 仲間	社交型	18	15.3%	14 感動	社交型	22	18.6%	14 笑顔	社交型	20	16.9%
15 風	環境型	19	16.1%	15 暑い	感情型	17	14.4%	15 暑い	感情型	20	16.9%	15 木	環境型	16	13.6%
16 飯盒炊飯	要素型	13	11.0%	16 涼しい	感情型	16	13.6%	16 自炊	共存型	16	13.6%	16 火	共存型	16	13.6%
17 仲間	社交型	12	10.2%	17 疲れる	感情型	16	13.6%	17 森	環境型	16	13.6%	17 森	環境型	16	13.6%
18 友達	社交型	12	10.2%	18 友達	社交型	14	11.9%	18 火	共存型	16	13.6%	18 思いやり	社交型	14	11.9%
19 水	要素型	12	10.2%	19 森	環境型	14	11.9%	19 鳥	環境型	15	12.7%	19 レクリエーション	上位型	13	11.0%
20 せみ	環境型	10	8.5%	20 歌	要素型	12	10.2%	20 水	要素型	14	11.9%	20 助け合い	社交型	11	9.3%
21 寝袋	要素型	10	8.5%	21 蜂	要素型	12	10.2%	21 緑	環境型	14	11.9%	21 鳥	環境型	11	9.3%
22 林	環境型	10	8.5%	22 星	環境型	11	9.3%	22 星	環境型	14	11.9%	22 触れ合い	社交型	11	9.3%
23 火	共存型	10	8.5%	23 夏	環境型	10	8.5%	23 友情	社交型	13	11.0%	23 星	環境型	11	9.3%
24 鳥	環境型	9	7.6%	24 火	共存型	10	8.5%	24 疲れる	感情型	13	11.0%	24 手作り料理	社交型	9	7.6%
25 夏	環境型	9	7.6%	25 鳥	環境型	10	8.5%	25 触れ合い	社交型	11	9.3%	25 緑	環境型	9	7.6%
26 花火	要素型	8	6.8%	26 石	環境型	10	8.5%	26 せみ	環境型	11	9.3%	26 感動	社交型	8	6.8%
27 疲れる	感情型	7	5.9%	27 坂	環境型	10	8.5%	27 夏	環境型	10	8.5%	27 癒し	社交型	7	5.9%
28 石	環境型	7	5.9%	28 せみ	環境型	10	8.5%	28 汗	共存型	9	7.6%	28 歌	共存型	7	5.9%
29 山登り	類似型	7	5.9%	29 汗	共存型	9	7.6%	29 涼しい	感情型	9	7.6%	29 空気	環境型	7	5.9%
30 協力	社交型	7	5.9%	30 笑顔	社交型	9	7.6%	30 思いやり	社交型	9	7.6%	30 友達作り	社交型	7	5.9%

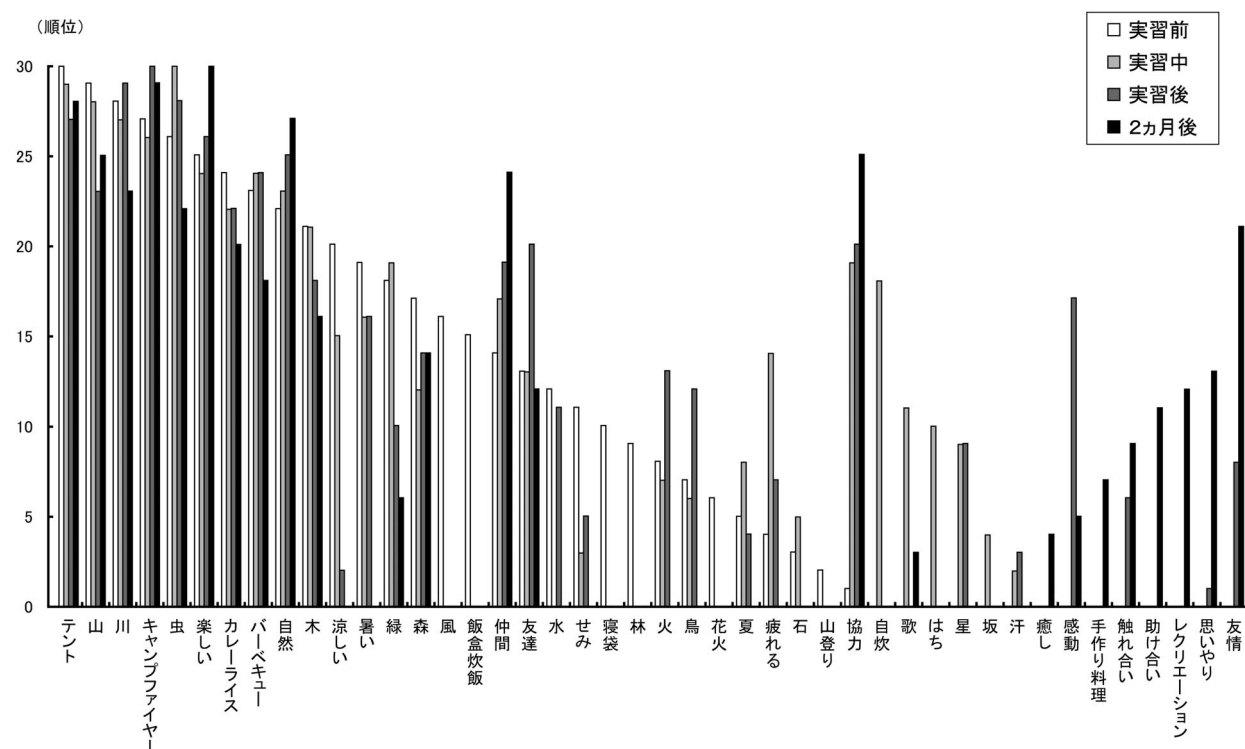


図3 キャンプ実習前後における上位30位までの反応語の変化

観的な感情や願望であり、これは実習後から減少傾向を示していた。要素型は「テント」や「寝袋」、「懐中電灯」、「靴」などの携行品を指しており、これはキャンプ実施前は20.2%を示していたが、傾向としては実習後に減少傾向を示した。環境型は、キャンプ場を含む場所や周囲に含まれる「山」、「川」、「自然」、「木」などを指しており、これは実習前は42.9%を示し、その後、実習中が37.6%、実習後は37.3%になり、2ヶ月後には28.4%へと実習前に比べ減少した。次の共存型は「キャンプファイヤー」、「バーベキュー」、「炊飯」、「ハイキング」などのキャンプ・プログラムに関する内容を指しており、これはキャンプ実習前が15.7%で、実習中に19.8%へと増加し、実習後から実習2ヶ月後にかけては減少を認めた。また、社交型は「友人」、「友情」、「協力」、「笑顔」などを指しており、これは実習前の4.3%に比べ、実習中では5.0%と変化を認めなかった。しかし、実習後では21.2%へと大きな増加を示した。さらに、実習2ヶ月後には32.2%の増加を認めた。そこで、社交型に見られた反応語の項目の変化を図5に示した。ここに挙げた「友情」、「仲間」、「感動」、「友達」、「笑顔」、

「思いやり」などの反応語はキャンプ実習前の反応語数としては少なく、実習が進むに伴い実習中、実習後、実習2ヶ月後において、増加には程度の差がみられるものの、全体的には反応語の増加傾向を認めた。また、実習後と実習2ヶ月後の比較では実習2ヶ月後に減少した反応語は「仲間」、「感動」、「友達」であり、実習2ヶ月後に増加した反応語は「友情」、「笑顔」、「思いやり」がみられた。

表3 分類別にみた反応語の内訳

感情型	対象者に対する主観的な感情や願望を示すもの 楽しい、涼しい、暑い、きれい、汚い、など
叙述型	対象について評価、個人的経験、叙述など 好き、嫌い、など
上位型	野外教育や野外活動の上位概念を示すもの
要素型	キャンプ実習への携行品 テント、カレーライス、飯盒炊飯、寝袋、など
環境型	キャンプ場を含む場所やその周りに含まれるもの テント、山、川、虫、自然、星、など
共存型	キャンプのプログラムに含まれるもの キャンプファイヤー、野外炊飯、ハイキング、ダンス、カヌー、バンガロー、トーチ、など
社交型	友人、友情などを示す 友だちなど
その他	(ここでは、感情型、態度型、叙述型を混合した) 不安、暑い、暗い、御飯が多い、夏、など

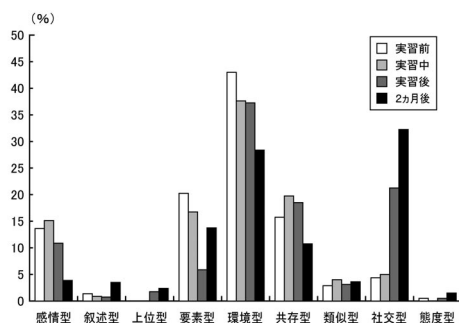


図4 反応語分類の比較

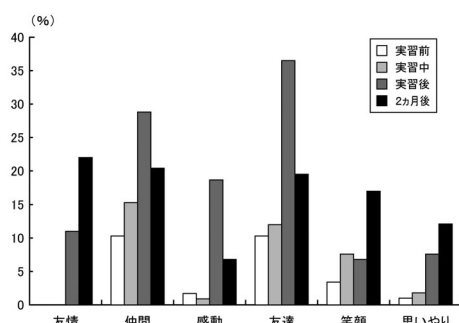


図5 社交型にみられた反応語

4. 考察

4.1 キャンプのイメージに対する反応語数の変化

キャンプのイメージに対する反応語数の多さはイメージの豊富さとも関連する。ここでは、本対象者の過去のキャンプ経験の有無が反応語にどのような影響を及ぼすのか、また、キャンプの参加前と参加後では反応語数にどのような変化を認めるのか、過去のキャンプ経験者（48名：41.3%）と未経験者（69名：58.7%）の間で比較検討した。その結果、キャンプの刺激語に対する平均反応語数はキャンプ実習前には両者の間で差を認めなかった。また、実習中、実習後、実習2ヶ月後のそれぞれの間でも両者間にキャンプ経験の有無による有意差は認められなかった。これは反応語の量的側面において、これまでのキャンプ経験の有無がキャンプのイメージに強く影響を及ぼしていないことを示唆しており、本対象者における両者のキャンプに対する知識水準は同等であると考えられた。次に、キャンプという刺激語に対する反応語数が直接キャンプに参加し体験することでキャンプの実習前後にどのような変化を示すのか、対象者全員を合わせて検討した。その結果、全体での反応語数はキャンプ実習前と実習中、実習中

と実習後、および2ヶ月後に有意な増加を示した、このことは、キャンプ実習前に比べ、実習中、実習後でもキャンプに対するイメージが豊富に獲得されたことを示唆しており、また、キャンプという刺激語に対する反応語数の増加は、直接キャンプに参加し、カリキュラムの進行に伴うキャンプ実習での体験学習によって、随時新たなキャンプの知識量を増やしたものと推察される。

4.2 キャンプに対する反応語の変化

キャンプ実習前後における反応語の上位30位までをみたところ、キャンプ実習前に多く見られた反応語は「テント」が最も多く、次いで「山」、「川」、「キャンプファイヤー」の順であった。次に実習中の反応語は「虫」、「テント」、「山」、「川」、「キャンプファイヤー」となり、実習前に対して大きな変化は見られなかった。しかし、2ヶ月後には、「楽しい」、「キャンプファイヤー」、「テント」、「自然」、「協力」、「仲間」などの反応語が上位の順位を占めるようになっていた。また、キャンプ実習前に比べ反応語の順位が実習中、実習後に下がった項目には「テント」、「山」、「川」、「虫」、「カレーライス」、「バーベキュー」、「木」などが挙げられており、逆に順位が上がった項目には「キャンプファイヤー」、「楽しい」、「自然」、「仲間」、「友達」、「協力」などの反応語が挙げられた。このことは、江橋^[17]が指摘しているように、野外での教育キャンプは個人的な活動もあるが、教育の場で、組織的な共同生活を通して協力的な活動の機会を作る場でもある。学生たちは、こうした共同生活の中から、社会的な秩序を守ることのマナーの大切さを学ぶとともに、他の仲間を良く知ることでもでき、さらに、野外での様々な生活体験^[2]を行うことによって仲間との融和が生まれ、お互いが協力し、理解する心が養われたものと思われる。そして、信頼感、親近感、友情、好ましい人間関係が育成され^[15]、これらの教育的効果がキャンプのイメージとして変容されたものと思われる。

4.3 全反応語数に対する反応語の分類

全反応語に対する反応語の分類を全体的に見ると環境型、要素型、感情型は実習前に比べ実習後に減少を示し、共存型は実習中には増加を示すものの、実習が終了すると減少傾向が見られた。社交型においては、実習の進行に伴い増加を示しキ

キャンプ終了2ヵ月後においてもその高まりが見られた。この中で、共存型はキャンプ実習中に増加を見ているが、これは、学生たちが授業が進行する中で「キャンプファイヤー」、「バーベキュー」、「炊飯」、「レクリエーション」など、キャンプ・プログラムに関する知識・情報を獲得したものと思われる。共存型の増加は、キャンプ・プログラムを実行する過程の中で、野外での生活体験に強く作用し、この体験が後々の社交型の増加に強く影響を及ぼしたものと考えられる。即ち、ここに挙げた「友情」、「仲間」、「感動」、「友達」、「笑顔」、「思いやり」など、社交型の形成に大きく影響をしているものと考えられる。これは、写真の活動場面でも伺い知ることができる。例えば、写真1での生活活動の拠点作りでは、7~8人のグループに班分けされたキャンプ班が、各々の炊事場作り、宿泊のテント設営を行っている場面である。ここではグループ全員がそれぞれの役割を分担し、お互いが協力しながら助け合っている姿が多く観察されている。写真2は、普段学内では交流のない学生同士でグループを形成させ、野外活動としてウォークラリーを体験させている場面である。この活動はグループ内の仲間が協力しないと、目的を遂行できない種目であり、そのため、それぞれの学生たちが知恵を出し合って活動を続けている。なかでも体力的に虚弱な学生がいるグループでは、相手をいたわり、歩くスピードを遅くし、疲れた場合には積極的に休息を入れながら助け合っている姿が観察された。また、ウォークラリーの終了時にはどのグループもご苦労さん、お疲れ、有り難う、良かったね、などとそれぞれの目的を達成した喜びを新たに知り合った仲間たちと共有し合っている姿が見受けられた。こうしたことは、本実習での教育的ねらいの中にある集団での協力による役割分担や責任感の向上、活動する喜びと感動の体験などを含んだキャンプ・プログラムの実践の結果として、社交型の増加に見られる「協力」、「仲間」、「友情」、「友達」、「思いやり」などの心が、このキャンプ体験により新たな反応語として獲得

されたものと考えられる。

5. まとめ

浦和大学短期大学部福祉科学生を対象に、自然を利用しての共同生活など様々な生活体験学習を行わせた場合、キャンプに対するイメージがキャンプに参加する前と参加した後で、学生の意識にどのような変化を及ぼすのか検討したところ、以下の結果を得た。

- 1) 対象者の過去におけるキャンプ経験の有無は、参加した117名の学生の中で、キャンプの参加経験が有る者は48名（41.3%）で、未経験者は69名（58.7%）であった。
- 2) 過去のキャンプ経験の有無では、イメージの情報量である反応語数の平均値に、実習前、実習中、実習後、実習2ヶ月後のそれぞれにおいて、両者間に有意な差を認めなかった。
- 3) キャンプという刺激語に対する反応語数は、実習前に比べ、実習中、実習後と有意な増加を認め、実習後から実習後2ヶ月には横ばいを示した。
- 4) 反応語の各項目について、キャンプの実習前後に上位に示された項目をみると、共通した反応語にテント、山、川、キャンプファイヤーなどの反応語がみられた。
- 5) 反応語の分類別から、キャンプに対するイメージの変化をみると、感情型、要素型、環境型はプログラムの進行に伴い減少傾向を示したが、友人、友情、協力、笑顔などを示す社交型には、プログラムの進行により有意な増加を認めた。

以上、本キャンプ実習の教育的ねらいが他人への思いやり、優しさ、協力などの体験学習にあることを考慮するならば、このキャンプ実習におけるキャンプ・プログラムの内容が、学生のイメージの変容に強く作用したものであり、これは野外での生活体験学習の効果の現れの一つとして捉えることができよう。

引用文献

- [1] 門脇厚司, 野外と生きる力, 「体育科教育7」, 大修館書店, Vol.9, 1999
- [2] 星野敏男, 『キャンプの特性』, (社)日本キャンプ協会, pp.1-6, 1998
- [3] 上柿和生, 現代っ子と遊び, 「体育科教育1」, 大修館書店, Vol.11-14, 1978
- [4] 中森孜郎、荒木 豊, 生活のリズムが崩れている子ども達, 「体育科教育8」, 大修館書店, Vol.21, 1978
- [5] 石川 中, 現代っ子のこころとからだ, 「体育科教育1」, 大修館書店, Vol.5-7, 1978
- [6] 文部科学省初等中等教育局編, 『体験活動事例集, 豊かな体験活動推進のために』, 2003
- [7] 永吉宏英, 『野外活動の教育』, (社)日本キャンプ協会, pp.50-54, 1999
- [8] Samuel T.Dana, Keynote Address, Education in and for the outdoor, AAAPER, pp.13-71, 1963
- [9] G. Donaldson & L. Donaldson, Outdoor Education definition, JOHPER May-June, p.17, 1958
- [10] 高橋康子、鈴木秀雄, キャンプに対するイメージの変容について, 「北里大学紀要」, pp.61-72, 1974
- [11] 井筒次郎, 日本体育大学キャンプ実習の内容設定に関する一考察, 一自由連想法による形式的・内容的側面からのアプローチ, 「日本体育大学紀要」, 10号, pp.69-76, 1981
- [12] Smith, Julian W., R. E. Carlson, H. B. Masters, and G.W.Donaldson, Outdoor-Education (2nded), Prentice Hall, Inc. Englewood Cliffs, NJ, 1972
- [13] 川村協平、東原昌郎、木庭修一, 組織キャンプにおける自己概念の変化に関する研究, 「東京大学紀要」, pp.209-218, 1979
- [14] 鮑戸 弘, 『イメージ測定の理論と方法, イメージの心理学』, pp.12-14, 1970
- [15] 黒木保博, 『グループのもつ治療教育的な力, 社会福祉援助技術論』, pp.210-216, 2002.
- [16] 戸川行男、倉石精一共著, 『現行の連想検査法, 連想検査法』, 白亜書房, pp.60-93, 1958
- [17] 江橋慎四郎編著, 『野外教育の理論と実際』, 杏林書院, pp.9-28, 1986
- [18] Fitzpatric, C.N, Philosophy and goals for outdoor education, Unpublished doctoral dissertation, 1968

Abstract

A study was carried out to examine the effects of welfare education camp on the image of camping in Urawa University Junior College students (n=117). The number of reactive words to the stimulus word (camp) in the post-camp significantly increased compared with the pre-camp. In the pre- and post-camp, common reactive words were the tent, the mountain, the river, and the campfire, etc. In the classification reaction words, the feelings type, the element type and the environmental type showed the decreasing tendency after practicing camping. On the other hand, the sociality type (for example, friend and friendship, cooperation, and smile, etc.) significantly increased in the post-camp.

Key Words: welfare education camp, organized camp, image, reactive words